
かをり

堀田マサヒコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
かをり

【Nコード】
N8305L

【作者名】
堀田マサヒコ

【あらすじ】
お盆がキーワードの、ショートショート。

またとんでもないことをやらかしてくれたな。

せつかくお盆休みで慣れない仕事から解放されと思っていたのに、かをりは私に休みを与えてはくれない。アパートのフロリングにこれ見よがしにとクレヨンで絵が描かれている。腹が立つ。何故私の子供はいつまで経ってもこんなことをしてくれるのか。今日と明日のおかずにと買ってきた弁当を放り投げるように置いて、どうしてそんなことするの。なんでお母さんを困らせるようなことをするの。と怒鳴りつけた。六歳にもなつて何で床と画用紙の区別がつかないの。かをりは反省している表情など微塵も見せずに淡々と答える。だってかをりが床に書いていいんだよって言うんだもん。

はあ。何言ってるの。かをりってあなたのことよ。

違うよ。私と同じかをりをりつて名前の子がここに来て、一緒に遊んだの。そうしたら床に絵を描きたいって言い出して、最初は駄目だよ、お母さんに怒られるよって話したんだけど、全然言うことを聞いてくれなくて、そうしたらかをりが絵を描き出して――

最後まで聞きたくなかったからリビングから出て行った。腹が立つとトイレにこもる癖がついたのは決して最近ではないはずだ。たぶん小さい頃から。

そうやって逃げるのか。逃げてたら何にも始まらないだろ。

嫌なことを思い出してしまい、記憶から逃げようと頭を軽く振った。私なりに気を遣っていたのに何も考えないでのらりくらりと生活して行けたらいいや、と考えている夫と姑に嫌気がさして離婚し、この安アパートに越してきたのは今年に入った直後だった。まだ五歳だったかをりを連れて出て行ったとき、かをりはやはり何も表情を変えないで工場の流れ作業をしている行員みたく、あらかじめそのことが決められていたかのように淡々とした表情、言動で私と一緒に来たのだ。

それが腹立たしい。

無表情で無関心であるかをりがどうしても私には受け入れられないのだ。

一応トイレの水を流しリビングに戻るとぼんやりとした眼で虚空を見上げている。どうしてこの子は変な風になってしまったのか。理解に苦しむ。私の子供がこんな風になっているのだと言うことを周りに知られているのだと思うが、それでは育てている私が変だと思われるようでは嫌でしょうがなく、公園に行くこともままならない。

それでいいと私は思う。変な風になったのはこの子がいけないのだ。もっと活動的で明るくてお母さんの言うことを何でも聞く娘だったらよかったのに。生んでしまった以上、育てないといけないが、それが苦しかった。

かをり。ちゃんと理由を言いなさい。

だから私じゃなくってかをりお姉ちゃんが。

なんでそんな嘘つくの。

嘘じゃないよ。本当だよ。私より二歳年上だって言ってたもん。

だからかをりお姉ちゃんって呼んでもいい、って訊いたら、いいよってちゃんと答えてくれたもん。私お姉ちゃん欲しかったもん。

もついい。クレヨンを片付けて部屋に行ってて。

かをりはクレヨンを一一つ一つ丁寧に色を揃えていく。靴下に色がつかないように床を大きく迂回してインターネットでクレヨンの汚れの消し方を調べる。落書き消し用の溶剤がホームセンターで売っているらしい。わざわざ買い物に行ったのにまた外に出かけるのかをり。あんた昼寝でもしてなさい。いい。絶対に落書きを増やしたら駄目だからね。

わかったよ、お母さん。

落書き消しを買い汚れを落としている間にかをりには弁当を食べさせた。美味しいとも不味いとも言わず黙々と咀嚼する。

落書きを消すことに夢中になり、全ての落書きを消し終えたときにはかをりは寝室で眠っていた。寝顔を見ていると、とても理想的な娘に見える。何故か分からないが、心の奥底をくすぐられる、心地いいとも不快ともつかない感情が芽生える。

お腹が少し空いてはいたが、今は疲れの方が大きかった。

私は見覚えのある家にいた。今のアパートよりもさらに狭く、六畳一間に押し込められるように家具がある。

ああ夢か。夢を見ているのか。部屋の中なのに靴を履いている。それにここは子供の頃の我が家だ。

夢の中であっても畳にスニーカーでいるのは居心地が悪い。玄関に脱ぎ捨てると、懐かしさを感じ、恨みを持った。どうしてこんな家に住まわせたのか。今ここに親が来たら、殴ってもいいだろう。

「裕子」

女の子の優しい声がする。部屋の隅に彼女がいた。

「裕子、私のこと覚えてるかな」

思い出せない。というか本能が思い出させないようにしている。思い出してしまうと全てが崩れてしまいそうで、怖かった。

「大丈夫。私の名前はね。あなたの大好きな人の名前」

大好きな人――

そうか。

「かをり……」

「思い出してくれたんだね、裕子」

やめて、思い出したくない……。

「大丈夫。思い出してもきつといい方向に向かっていくから。思い出して」

苦しかった。私の親は働いていることを理由にして私に何もしてくれなかった。欲しかった人形なんか買ってくれたこともないし、私が真剣に話をしているのを鼻で笑ってそんなことで悩んでいるの。かつて言われて全然聞いてくれなかった。

だから家にいるとき、誰かにいて欲しかった。

私は名前も知らない町へ引越していった最初の友達の名前で、架空の友達を作ったのだ。

かをり。

思い出せなかった。我が子にかをりとつけたのは、私の架空の友達の影響だったのか。

「違うでしょ。裕子。もっと思い出して。私はその子じゃない。私はかをりとして生まれるはずだったんだよ」

ああ。そうか。かをりはもう一人生まれてくるはずだった。

かをりという同じ名前のお姉ちゃんの意味が分かった。

のりくらし生きている夫の姑に嫌気がさしたのが何故か分かった。

私の初めての子供はこの世に生を受けることがなかった。流れてしまったのだ。

あんな親のように育てたくなかった。だからこの世に生を受けてくれたかをりが本当に嬉しくて、大事に、誰からも恨まれないように、育ててあげようと誓ったのに。なのに夫は。病気だからという理由でかをりを捨てたのだ。

「仕方なかったんだよ。私はあなたを恨んでないよ。でもお願い。かをりのことを思っであげて。生を受けたかをりは何も間違っていないよ」

どうして理解に苦しむのか。どうして公園に行かせたくないのか。かをりが私そっくりだったから。私も親に無表情で気味が悪いって言われ続けていた。どうして忘れていたのか。私はかをりをそんな風に見ていたのか。

「それだけじゃないでしょう。公園に行ったらどういう気持ちになったのか教えて」

公園のお母さん達は本当に美しく、気高く、近寄りがたかったんだ。すごく。幸せそうだった。

誰かが楽しそうにしていたり、愛し合っていたり、優しくされて

いる人を見ると、辛い。悔しい。自分が楽しくなかったり、愛されてなかったり、優しくされていなかったりするのが悔しいからだ。だからせめて自分だけは我が子を優しく、愛して、楽しく生きようと心に誓ったはずだったのに、あつという間に忘れて、今では我が子に同じ目を合わせようとしていた。

「現実が辛かったんだよね」

シングルマザーは上辺では一人で育てるなんて偉いね。頑張ってるね。って言われても、裏では冷たい陰口をたたかれる。ただ娘とファミレスでご飯を食べているだけなのに、テレビのバラエティを見るかのようにじろじろと眺めてくる幸せそうな家族。

それが苦しかった。

「どうなりたいのかな。どうありたいのかな」

私は――

見慣れた天井が目に入った。そうだ。ここは我が家だ。

気づいた。今日は八月十五日。お盆休みの最終日に近い今日。生まれてくるはずだったかをりは。生を受けられなかった。

帰ってきたんだ。この家に。私の為に。

せめて彼女の思いを今生きている私が叶えないといけないんだ。そう思い隣のかをりを見つめる。寝息を立てるかをりの頬をなでたとき、なぜだか心の底から全てが吐き出されるように涙が出てきた声にならない声で、ごめんね、ごめんね、と必死に呼びかけるように言った。私がされてきたようなひどいことはもうかをりにはさせたくない。どうして忘れていたのか。仕事や家事や育児を言い訳にしていたんだ。本当はしっかりと心の奥底にあつたじゃないか。

お母さん、大丈夫。

優しい子よ。こんな私を心配してくれる娘をしっかりと抱きしめた。

かをりお姉ちゃん、私は私と、かをりの味方だから。そう言う小さな我が子が必死になって、私を抱き返してくれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8305/>

かをり

2010年10月8日14時46分発行